



郷土史

ていね

第 89 号

平成 27 年 5 月 13 日

手稲郷土史研究会会報

定期総会・懇親会開催

定期総会

4月22日（水）に、手稲郷土史研究会の定期総会と懇親会が開催されました。

総会は、茂内義雄会長の挨拶のあと、平成26年度の事業報告、収支決算報告、平成27年度の事業計画、収支予算などの案件について審議され、可決されました。

審議された事項の詳細については、「定期総会議案書」をご覧ください。

議事に先立ち、「特別功労」、「ものしり博士」の表彰が行われ、次の方々に賞状が授与されました。（敬称略）

特別功労賞：鈴木清士、松永恭一、菊地慶一、岡田信一

ものしり博士：佐々木光男、猪股修輔、乙黒通子



『手稲郷土史研究会会長 茂内義雄 挨拶』



桜の便りも直ぐそばまで来ました。

平成27年度、この会の活動も10年目に入ります。「一つの転機かな？」という気持ちで今日を迎えております。年度末には、振り返って「この10年間は、我々の会にとってどういう10年だったのか？」と、ゆっくり皆様と語り合いたいと思います。

さて、この10年目は、皆様にとって本当にこの会がよかったなといってもらえるような活動になるようにと、内容面を考慮して、議案書を作り上げたつもりです。会員のひとり一人が「この会に来てよかったなァ」と思ってもらえるような会になることを願っております。1年間よろしく願いいたします。



懇 親 会



㊦ 手稲郷土史研究会副会長 一ノ宮博昭 挨拶手稲

表彰されたみなさまおめでとうございます。

これで、ほぼ全員博士になったのではないかと思います。

この一年、大変興味ある面白い話をきくことができました。また新年度も新進気鋭のみなさまの発表もあるようで、大変楽しみにしております。よろしくお願いいたします。

㊦ 手稲区市民部長 江島圭一氏 挨拶

市民部長に就任して、4年目になりました。

ただいま表彰された方々、長い間ご尽力されたようで、本当におめでとうございます。

この会には、日ごろからなにかとお世話になっております。例を挙げさせていただきますと、小学校の歴史的資料の整理、データベース化、それを基にホームページに公開しております。また、「ガイドマップ」(「手稲区ガイド」「手稲区歴史ガイドマップ」)を作っております。その際もご協力いただき、いろいろな場面で皆様のお力添えをいただいております。皆様のご指導、ご支援がなければ、これらの事業ができなかったと思います。今後ともよろしくお願いいたします。



手稲区といたしましても、「ふるさと手稲再発見」というようなことから、歴史をもっともっと見つめ直そうという事業を進めております。手稲の遺跡など歴史的なものを次の世代に伝承していくということは非常に大切なことだと思います。そのためには、皆様のお力添えをいただかなければならないところであります。どうかよろしくお願いいたします。皆様

の会は、今年 10 周年を迎えられるとお聞きしております。この記念すべき年に「手稲郷土史研究会」がますます発展されますことを、こころよりご祈念申し上げますとともに、皆様方お一人おひとりのご健勝、ご活躍をお祈り申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

本日は、お招きいただきまして誠にありがとうございました。



分科会報告

手稲石の会

● 会の概要

3月の第107回定例会において「手稲石の会」の活動を承認いただき、早速関係者で何度かの打ち合わせを行いました。これまでに決まったことについて報告します。

- ・会の事務局 沖田宅とする
- ・会代表：一ノ宮博昭、アドバイザー；若松幹男、事務局：沖田紘昭
- ・勉強会の開催計画

「手稲山の成り立ちと手稲鉱山」

講師 会員若松幹男さんによる手稲の地層と鉱山地質、岩石についての講演

「北海道新幹線の進捗状況と手稲トンネル」

講師 札幌市新幹線推進室長 横井寿郎氏またはその推薦者

- ・手稲鉱山視察会予定

手稲山と手稲鉱山の見学ルートを作るための調査

雪解けを待って、6月頃に見学者を案内するための最適ルートを検証するために、管内の地質、露頭、岩石見本採取等を実施する

- ・事務局経費、印刷費を作るために

手稲鉱山からでた鉱物標本をつくり、当会へのカンパを集める

- ・名刺の作成を急ぐ

- ・会員の募集

当会に入りたい方を募集しております。お気軽に声をかけてください。

メンバーが10名を超えてきた段階で総会を開催する予定です。

手稲石の会事務局 沖田 Tel 011-682-0755
090-7648-2711

次回の予定

次回(6月10日)は、北海道開発局 札幌開発建設部の講演「手稲の国道」を予定しております。
会場は、視聴覚室です。

● 「手稲石の会」関連知識

手稲山の地質と手稲鉱山 (1)

会員 若松 幹男

「手稲石の会」の“手稲石”は、“^{テイネイシ}手稲石”という固有名詞でもあり、“手稲にある石”という普遍的な石の意味でもあります。

固有名詞の“^{テイネイシ}手稲石”は、1993年に手稲鉱山で発見された新鉱物です。右図のような針状構造をもつ青色のきれいな鉱物であり、マニアの間では高値で売買されているようです。



“手稲にある石”は、“手稲の地質”、或いは、“手稲山の地質”と言いかえることもできます。

では、手稲または手稲山の地質(石)にはどのようなものがあり、何時どのようにしてできたのでしょうか。手稲鉱山には、手稲石の他にどのような鉱物が隠れているのでしょうか。手稲山の地質と手稲鉱山との地質はどちらが古いのでしょうか。このようなことを連載で述べて行きたいと思っています。

会員の広場

郷土史「ていね」の創刊と題字

前田 鈴木 清士

研究会が発足してようやく軌道に乗ってきた平成19年の秋頃、誰からともなく「会報を発行しようや」との声が上がり、当時総務部長だったわたしにお鉢が廻ってきました。まだ財源が乏しいため、パソコンによる手作りで、A4版、モノクロ4ページ、100部程度の印刷を想定しました。

さて、会報の顔となる会誌題名・題字をどのようにデザインしたらよいか迷いました。当初、郷土史「がるかわ」がよいのではと思いましたが、この題名は他にもたくさん使われているので、素直に「ていね」としました。

題字は、パソコンの文字では味気ないので、わたしが以前からいい書体だなーと思っていた、一ノ宮さんが以前に編集・発行していた～手稲のミニコミ紙～「ていね倶楽部」の由緒ある「ていね」の書体を使わせていただきました。

右の情報誌の題字は、手稲在住の書家、北海道書道展審査委員 嘉瀬満秋氏(本名宮崎寛)の書によるものです。氏は、手稲稲穂の一ノ宮さんの隣家で、子どもの頃からのお付き合いだそうです。一ノ宮さんが編集発行していた手稲の情報紙「ていね倶楽部」は、平成6年から平成12年までの6年間にわたり手稲住民に貴重な情報を提供していました。

創刊号から4号くらいまで高木、佐藤、私のメンバーで会報を作っていましたが、その後小田さんに引き継いで、現在90号近くまで発行されていることは、本当に立派なことと感謝いたします。

* いま私の手元に、創刊号が20部ばかり残っていましたので、後から入会された方で、希望される方は広報部佐々木まで申し出てください。



..... ◇ ◆ ◇ ◆ ◇

ふり返れば未来

星置 菊地 慶一

今年の初め「戦争の悲惨さより戦争の英知をつたえよ」と、ある女流作家が週刊誌に書た。戦争時代にも人々の知恵や、懸命に生きる姿があったのは事実だが、「あの戦争は私の人生にとってかけがえのない面白い経験でした」と書いているのには、啞然とした。

わたしたちは都合の悪い過去は忘れがちである。過去を美化することにすがって生きている人も多い。しかし、戦争について言えば、どれほど戦場の兵士も銃後の老人、女性、子供たちも、きびしく辛い思いを経験したかを忘れてはならない。

そんなことを考えて、冬の間つたない物語を書いてきた。どこも本にしてくれる出版社などあるはずもなかったが、ある会社の会長さんが、その本はうちで出そうと、申し出てくれた。北海道空襲で死んだ子供たちは、228人もいる。その子供たちの日常と、形象を伝えたいという、下しくそな文章を夏にも出版したいと願っている。

話は飛躍するが、この手稲郷土史研究会の活動も、過去から学んで未来につなげようという、骨太い精神が底流にあるはずだ。地域の歴史的テーマも全道全国、この国の社会につながっているはずである。その視点がやや遠慮がちではないだろうか

「ふり返れば未来」ということばがある。「右見て、左見る」のも大事であるが、後ろを見てから前を見ると、必ず行くべき未来が見えてくるはずである。歴史研究の一つの視点ではないか。

名もない庶民のひとりとして、戦後70年、次の区切りには縁のない者として、一人ぼっちの小さな闘いを続けていけたらしあわせである。